小論文

慶應義塾大学　文学部　1/2

設問Ⅰ

【解答例１】

競争が自然選択を通じて成長や革新につながると考えられたのは、市場経済が資源配分メカニズムの中核的な役割を担って以降だが、競争の対象は稀少な財・サービスと機会である。しかし他人との差異の産出のために稀少品の獲得に駆り立てられるとき、稀少の判定基準が一元化し、序列が明確化するため、競争は激化し、争いへと転化する。競争は人類を豊かにしたが、ニーズや生きがいを利得に置き換え、人間の依存関係を見えなくさせ、自然環境を劣化させる点で限界がある。だが無競争を奨励すべきでもない。大切なのは、勝敗の判定基準を多元化し、勝敗に負けた人の処遇を考えることだ。グローバル化が進行する現在、争いを未然に防いで競争するには、伝統社会の方法に学んで意図的に曖昧さを残す工夫も必要だが、競争による自立や効率といった価値観そのものを見直すべきだ。

【解答例２】

十九世紀の産業社会の登場以降、稀少な財、サービス、機会を対象とする競争はそれらの総量を増やす点で人類を豊かにする一方、誰もが苦しい競争から逃れられなくなった。競争原理には無形の価値の利得への置き換えなどの限界がある一方、順位をつけない徒競走のようなおかしな事態も生まれた。したがって競争か無競争かの二者択一ではなく、競争の領域と個々の結果が生み出す影響の範囲をどのように限定するかが問題だ。そのためには勝敗の判定基準の多元化と競争に負けた人の処遇が重要である。閉じられた伝統集団では負けの処理の様々な工夫がなされ、争いに転化しない競争が実施されてきた。これを今日の資本主義世界で有効にするには、国や地域の閉じた空間では競争に関する情報操作が大切だが、諸個人では個と集団の組み直しや自立などの価値観の見直しが必要である。

設問Ⅱ

【解答例１】

冷戦後のグローバル市場の拡大は市場での競争を争いに変えた。富と技術を占有する多国籍企業・金融資本は発展途上国の資源と安価な労働力をもとに成長し、途上国に貧困と環境破壊をもたらした。この市場競争による効率追求が世界に安価な商品を供給したことは事実だが、その競争の激化により途上国では労働や生活を支える人間同士の依存関係も人間と自然の依存関係も壊されたのである。

競争を否定せずにこれに対抗するには価値の多元化による依存関係の再構築が必要だ。フェアトレードはまさにその試みの一つであり、そこには環境保全や南北格差の是正という、価格とは別の価値を軸にした途上国の農民と先進国の消費者の関わりがある。途上国の農民が低農薬・有機農法で育てた作物は市場で高値となるが、先進国の消費者がその価値を含めて購入することで国境を超えた依存関係が生まれ、それが途上国の貧困と環境破壊を食い止めることにも繋がるのである。

©河合塾　2024 年

【解答例２】

稀少性をめぐる競争が激化する現代、日本では、観光目的の古民家ブームが起きている。観光客向けの施設が増設され、オーバーツーリズムの問題も起きるなど、自然環境と秩序の破壊が進むことで、地域住民から批判の声もあがっている。

古民家ブームは地域活性化を通じて地域住民の自尊心を高め、経済的な恵みを社会にもたらす。しかし、古民家の魅力は建物だけにあるのではない。里山の手入れや季節の恵みを分かち合う年中行事など、限られた自然を資源として共有し、持続的に消費するための「調整」の知恵が豊かな地域文化を生み出してきた。それを支えるのは、閉じた社会の中で育まれてきた住民の依存関係だ。

観光の意義は、単に非日常的な風景を消費することではない。古民家という異空間に身を置き、地域で生きる人々との交流を楽しみ、自然や伝統的に培われてきた文化といった稀少性を体験することにあるのだ。

【解答例３】

競争は自立的な個人の成長の場であるとしても、ここから零れる者を孤独な敗者へと追いやってはならない。「障害者自立支援法」という法律がある。それは競争の外部にあった者を改めて競争に参画させるものだ。障害のある人が社会の中で自発的に自分の個性や能力などの稀少性を発揮できるのはよい。しかし「自立」とは一人きりの奮闘を意味するのではない。障害は人それぞれに、実に多様である。その人には多くのできることがある。できないこともある。労働の作業過程で多くの失敗もある。だが、雇用という競争の場で個人の失敗やできないことに不寛容だと、差別や排除のベクトルが働き、「争い」へと激化する危険性もある。だから様々な失敗を見越し、障害の多様性をカバーできるように、仲間たちとの依存関係を大事にするなど、周りの支援を厚くすることが大切だ。それがあって初めて、障害を持つ人たちが競争の中で働くことに生きがいを持てるのだと思う。

【解答例４】

チームスポーツではレギュラー競争が熾烈に行われるが、それが争いないし分裂に発展することは稀である。それはなぜだろうか。

一つにはチーム戦術次第で必要となるレギュラー選手の能力も変わるため、その判定基準が多元的だからだ。そのおかげで補欠の選手もいつか試合に出られるかもしれないという期待を抱くことができる。だがより重要なのは、仮にレギュラーになれなくても、補欠なりの役割があることを多くの選手が理解しているからだろう。補欠はレギュラー組の練習パートナーとなったり、試合での飲み水の受け渡しをしたりする。こうした補欠選手の寄与を抜きに、レギュラー組だけでチームスポーツは成り立たない。こうした依存関係の理解が選手全員に共有されているからこそ、チームスポーツでは競争が争いや分裂を免れているのである。

これは個と集団を今後、健全な形で結び直すための貴重なモデルとなるだろう。

©河合塾　2024 年